秀　賞

強く握った手

山形県鶴岡市立鶴岡第三中学校
二年　鈴木友美

「ちから」をもらうって何だろう。何からどんなふうにもらうんだろう。目には見えないその「ちから」を、私は夏休みに身をもって体験することとなった。

私には大好きなひいおばあちゃんがいた。ばあちゃんは腎臓が悪く、この夏の猛暑で体調をくずして入院していた。私は夏休みのある日、母と妹達とばあちゃんのお見舞いに行った。病室のベッドの上には、顔色が悪く元気のないばあちゃんがいた。家に居た時とは様子のちがう姿に、大丈夫だろうかと不安になったが、「来たよ。」と声をかけると、「部活、頑張っているか?」と明るく返してくれ、少しほっとした。早く良くなりますように。そう願いながら、「ばあちゃん、また来るね。」と声をかけ病室を後にした。この時はまだ、また会える。また話せる。私はそう思っていた。

しかし、数日後またお見舞いに行くと、ばあちゃんの容体は一変していた。肩で息をし一生懸命何かを伝えようとしているが、その言葉がなかなか聞き取れず、私はやりきれない気持ちでいっぱいになった。この時、ばあちゃんがもう長くはないと知らされた。何にもしてあげられない自分。どんな言葉をかけたらいいかも分からない自分。なんて力がないんだろう。家族みんなが声をかける中で、私はばあちゃんの手をぎゅっと強く握った。それが私の精一杯だった。

私が生まれた時から優しくしてくれたばあちゃん。よく笑って、話を聞いてくれたばあちゃん。初めて編み物に挑戦した時、ずっと側で教えてくれたばあちゃん。時には厳しく怒ってくれたばあちゃん。たくさんの思い出が次々と頭の中に思い出され、私は涙が止まらなくなっていた。それでも、私はばあちゃんの手を強く握り続けた。すると、一瞬ばあちゃんが、ぎゅっと私の手を握り返してくれた。力強かった。泣かないでとなぐさめてくれているような、しっかりしなさい。と応援してくれているような気がした。本当に嬉しかった。呼吸をするのもやっとのばあちゃん。一番苦しくて辛いはずなのに、こんなに頑張っている。しっかりしなきゃ。握ったばあちゃんの手は本当にあたたかくて、優しくて、落ち着いた。急に「ちから」がわいてきた。ばあちゃんが私にくれた「ちから」だ。

そのまた数日後、赤川の花火大会があった。病室の窓から一緒に見ようと、家族みんなで集まった。ばあちゃんの意識はもうなかった。でも、窓からはみ出るほど大きな花火を、ばあちゃんと一緒に見ることができた。今まで見た花火の中で一番きれいな花火だった。

花火を見た五日後、ばあちゃんは天国へ旅立った。眠るようにゆっくりと。私はたくさん泣いたが、心は不思議と前を向かなければ、という気持ちでいた。きっと、ばあちゃんがくれた「ちから」のおかげだ。

私は誰かに「ちから」をあげられるのか。何かをしてあげられるだろうか。その疑問は母からの話を聞いて、答えが出た。

「ばあちゃん、友美たちがお見舞いに行くと全然ちがったんだって。顔見たり話したりすると、体調持ち直したり、食欲出たりしたんだって。」

それが私の「ちから」だったのかもしれない。何もしてあげられなかったようで、心残りもあったが、その話を聞いて、自信がわいた。子供でも、小さなことでも、誰かに「ちから」をあげられる。そして、きっと自分も、家族以外にもいろいろな人、物、事から「ちから」をもらいながら生きている。目に見えず、聴こえないが、感じることで生きる原動力に変えているのだと思う。自分の発する言葉一つ、行動一つが誰かの「ちから」になるかもしれない。そう思うと自分のすることに責任を持たなくてはという思いも出てくる。

そんな大切なことに気付かせてくれたばあちゃん。天国でゆっくり休んでいますか?

私はばあちゃんからもらった「ちから」で自分に関わる全ての人、これから出会うたくさんの人に、「ちから」をあげられるような人になりたい。ばあちゃんが残してくれた「ちから」は、私の心の中にずっと生き続けるから。話せることの幸せ、食べることの幸せ、当たり前だけど、いつできなくなるか分からない当たり前。そんなことに感謝しながら、一日一日を大切に、強く生きていきたい。

「ちから」は、全ての人が持っている魔法。

家族であろうと他人であろうと動物であろうと、無条件に与え、与えられるもの。そうして今日も明日も、見えない「ちから」に支えられ生きていくのだと思う。